

# 管理頭数の適正化と観察の徹底により好成績を維持

通常、酪農経営を営んでいる生産者は、現状維持もしくは将来の規模拡大をめざすのが一般的である。しかし今回は、作業の省力化と管理頭数の適正化を図り、また、牛をよく観察するためにも、牛群の規模を縮小したことで、結果的に好成績を維持している生産者を紹介する。

**高レベルの乳量・乳質を維持**

現在の飼養規模は搾乳牛頭数35頭、繋ぎ牛舎と一部放牧で管理。飼料給与方法は分離給与で、ミックスタイプの濃厚飼料以外に、稲ワラサイレージ（発酵がうまくいくように刈り取り・脱穀後3日以内にロール化）、自家産ロール（雑種）のみ給与する。飼料の給与回数は朝、昼、夕の1日3回。搾乳牛1頭当たりの平均乳量は32・6kg、体細胞数は10・9万である。

**放牧を取り入れた飼養管理とカウコンフォート**

牛へのストレスを少なくするために、天候がよい日には牛舎裏手の放牧地へ全頭放牧する。放牧時間は、朝の搾乳後の10～12時頃までで、13時には昼の餌やりで牛舎に戻す。また、放牧を行うためにも削蹄は徹底して行い、脚、飛節の腫れは非常に少ない。

また、飼槽レジンの塗布、ウォーターカップの変更、暑熱対策で寒冷紗を設置するなど、カウコンフォートの改善も行っている。

体細胞が低い理由に、前絞りを徹底して行う、牛群検定の結果をチェックし体細胞数の高い牛は最後に搾乳する、などの対応があげられる。

また、「前搾りの段階で牛が糞をしたり脚を上げる行動を見れば、その牛に何か問題がある証拠であり、搾乳中でも常に牛をチェックすることが重要」と農場主は語る。

7年ほど前、100頭規模（搾乳40頭、育成60頭）から経営を引き継ぐ際、農場主は夫婦2人での労働性を考え、60頭程度への規模縮小を英断した。さらに、パーラーに入らない、気性が荒いなど農場に馴染まない牛は5年ほどかけて淘汰・改良を行い、1人でも管理できるよう気性が穏やかで、手間のかからない牛を選抜してきたという。

**牛を観察する時間が増え、成績は高位安定**

牛のストレスを少なくし、牛をよく観察し対処することで、ここ最近では分娩前後の代謝病がほとんど発生せず、獣医を呼ぶ必要がないという。農場主は、「牛群検定のメリットを最大限活用して1頭ごとの飼養管理・観察を徹底し、牛にストレスを与えず、餌を十分に食べさせるといった基本に忠実な管理を行うことが重要。今後は、現状の規模を維持し、牛の体型の改良に力を入れつつ、地元耕種農家への堆肥還元から自給粗飼料の利用といった地域循環型の酪農の取り組みを強化したい」と力強く語っている。

## 飼養管理の改善



飼槽レジンの塗布



寒冷紗の設置で暑熱ストレス対策



古いウォーターカップ



ワラサイレージはローカルカッターでカット。サイレージの匂いもよく、高品質

ワラの切断長は10cm程度



新しいウォーターカップ



牛舎裏手の斜面で放牧



牛床は短いが、放牧の効果でストレスなく寝ている

### 農場の直近の成績

	平成19年	平成20年	平成21年
乳量 (kg/日・頭)	31.8	34.0	32.6
乳脂肪 (%)	3.73	3.74	3.82
乳タンパク質 (%)	3.45	3.28	3.32
無脂乳固形 (%)	9.03	8.84	8.79
体細胞数 (千)	111	105	109

DATA 事業規模  
所在地: 東北地方  
飼養頭数: 65頭  
従業員数: 2人